

令和 2 年 6 月 12 日現在

機関番号：32601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02698

研究課題名(和文)多言語公共空間の形成とコミュニケーション秩序

研究課題名(英文)The construction of multilingual public spaces and the interaction orders

研究代表者

猿橋 順子 (Saruhashi, Junko)

青山学院大学・国際政治経済学部・教授

研究者番号：10407695

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：多言語公共空間の相互作用秩序を探究するために、首都圏の大型公園等で開催される「国フェス」で実地調査を行い、以下の知見を得た。第一に、当該国を代表する言語とその文字は文化資源として広く活用されるものの、準備段階では日本語が優勢となる傾向がある。第二に当該国独自の文化を紹介する際に、ディスコースネットワークの転換が認められた。たとえば、厳しい自然と社会経済的環境から、弱い存在である子どもを守るものと描かれる医薬品が、日本への流通を訴求する際には「オーガニック」や「美白」のディスコースに結びつけられる等である。第三に運営側が想定している言語政策と、実際に展開される言語政策には乖離が認められた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

実地調査を行った15の「国フェス」は、いずれも言語管理や言語対応、言語政策について明文化された方針等を備えていなかった。本研究の知見は「国フェス」を担う人々が、将来的に、どのような言語・コミュニケーション場を理想とし、そのためにどのような準備や対応が必要であるのかを検討する上で、ヒントとなることが期待される。

また、本研究では、多言語公共空間のダイナミズムを抽出するための方法論的な試行により、その限界や課題も明らかになった。不特定多数の人が出入りする場での力動を完全に把握することは不可能だが、複数の分析方法を組み合わせて用いることで、事例研究の蓄積から一般化可能性を検討することは可能である。

研究成果の概要(英文)：Following findings may provide insights for considering interactional orders of multilingual public spaces in globalization and to make these occasions to be beneficial for intercultural understanding. First, the language of the country and its scripts were taken as a part of the cultural resources, however, Japanese tends to be prioritized during the preparation period. Second, when unique cultural objects or concepts are to be introduced to the host society, the transformation of discourse networks was observed. For example, the discursive resource of a sun-protection product was presented to protect vulnerable children from severe climate and socioeconomic environments. The presentation methods change to feature “organic” and “whitening” when a product is contextualized as part of Japan’s cosmetic market. Third, gaps were identified between the ideal language policy presupposed by the organizer and the actual language policy modified by the participants in each situation.

研究分野：社会言語学

キーワード：マルチリンガル 公共空間 コミュニケーション秩序 エスノグラフィ 言語政策 言語管理 フェスティバル ディスコース分析

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

1. 研究開始当初の背景

本研究は、都市化およびグローバル化に伴う社会言語学における研究課題上の要請と、ポストモダニズム的な視点に立った研究の発展と軌を一にするものである。ことばの社会的機能に注目する社会言語学では、これまで家族、近隣コミュニティや交友関係、宗教とその施設、職業と職場、教育と学校という5領域を基本的な社会領域と分類してきた(Romaine 1994 土田・高橋 1997, p.54)。Spolsky(2009)は異言語話者が介在する場に求められる言語マネジメントを探究する上で、公共空間を対象とした調査研究の重要性の高まりを指摘している。

こうした社会変容に呼応して急速に増加したのが、観光地や旅行者の視点に立った事例研究である。世界的に人気の高い観光地であるイタリア、ピサの斜塔における事例研究において、Thurlow & Jaworski (2014) は世界各地から来る観光客が瞬時のうちに「公共的文化」(p.469)を共有すると指摘する。それは、この観光拠点を管理・運営する人々が自ら演出したり、誘引したりするものが中心となる。しかし、それだけではなく隣接する土産店、ガイドブック、ひいては過去にこの地を旅行した人々が個人的経験として SNS に掲載する記事などによっても生み出され、再生産され、循環していく。それぞれ異なる言語文化的背景を持つ観光客は、初めてその地に立つものであっても、相互に参照しあい、複合的な談話機能を理解し、その積極的な参加者として談話の再生産に寄与するという。

本研究は、こうした観光地を事例とした談話構造とその流過程に類似の傾向が、国際色を持つイベントの場でも確認され得るかを探究する。週末になると、代々木公園(東京都渋谷区)や日比谷公園(東京都千代田区)では、ベトナムフェスティバルやブラジルフェスティバルのように、国名を冠した催し物(以下、「国フェス」と称す)が開催される。名称や内容、開催に至った経緯、実行委員会の構成員など、どれを取ってもそれぞれの独自性が見られる。一方で、全体として類似の催しという印象も受ける。同一の場を共有していることに加え、運営者や参加者の相互参照や相互参加が手伝ってか、その類似性は年を追うごとに増しているようにも見える。

グローバル化に加え、国家ブランド化も手伝って、「国フェス」は増加および拡張傾向にあると見える。その背景には社会や文化のイベント化(茶谷 2003; 永井 2016)や文化消費の高まりに伴う文化の商品化(Bennet et al. 2014)なども密接に関係していると考えられる。社会言語学的にも、言語文化圏の交錯・接触場面の凝集的な実践場と言え興味深い。そこで、本研究は、より明確な目的が設定されながらも、不特定多数の人々の来場という意味では予測不可能で、予め想定されているコミュニケーションと、即興的なコミュニケーションが複合的に展開される「国フェス」の場での相互作用秩序に接近することに取り組む。

2. 研究の目的

本研究は多言語・多文化・多目的の公共空間となる国際的な側面を含むイベント(「国フェス」)におけるコミュニケーション秩序の形成について事例研究を通して接近することを目的とする。人々は「国フェス」で提示される雑多なディスコースをどのように管理し、その場に参加したり距離を保ったり、交渉したりしているのだろうか。

これまで、公共空間の多言語化現象については言語景観研究が多くの貢献を成してきた。東京の言語景観研究として代表的なものに Backhaus(2007)がある。言語景観研究は言語種やその構成比率に多くの関心が払われ、談話分析や記号論的解釈との融合可能性については萌芽的な段階にある(Blommeart 2013)。本研究では、エスノグラフィの手法を用いることで、公共空間に提示されるテキストと、人の流れや行動様式といった非言語との関連も含めたマルチモーダル分析によって(cf. Scollon 2015)、即興的な場の力動を丹念に描き出すことを目指す。

また、これまでの研究のなかで研究代表者は、移民が、自身の帰属する移民コミュニティとホスト社会との言語文化的な橋渡しの経験をすることが、エンパワメントの維持や高まりに寄与する側面について注目してきた(猿橋 2013, Saruhashi 2018)。イベントという時限的で即興的な公共空間においては、このような橋渡しの役割をより多くの人々が経験できる。言語文化的な価値の再認識や、伝達者・仲介者としてのアイデンティティの獲得など言語的気づきやエンパワメントへの作用についても探究していきたいと考える。

3. 研究の方法

調査では、まず、インターネットや在日外国人コミュニティ、留学生からのヒアリングを通して首都圏で開催される「国フェス」の情報を収集した。多くの「国フェス」は公式サイトや公式 SNS を運営しており、そこでフェスティバルの主催者、趣旨、内容などについて情報収集と整理を行った。特徴や日程を鑑みて、参加する「国フェス」を選定した。参加にあたっては、実行委員会に調査の意図と趣旨を伝え、一般参加者に認められている範囲で聞き取りや撮影、録画を行うことを伝えた。

事前に「国フェス」公式 HP で得た情報に基づきつつ、それらに縛られすぎないように一般参加者の流れや盛り上がりに沿って、興味深いと感じた現象は立ち止まって観察した。観察や聞き取りで得られた情報は、佐藤(2006)を参照してフィールドノートにまとめた。

調査を通して、つながりが生まれたり、研究課題の着想を得た「国フェス」には翌年も調査を継続させている。「国フェス」の全容から言っても、個々の「国フェス」内での調査においても、多くのことが同時に起こっており、その関連性は極めて複雑である。調査者は一時にひとつの場所にいることしか出来ないため、観察した事象の選定は、たとえば「一般参加者の流れに沿うよ

うに心がける」といった指針を設けたとしても、恣意性を完全に排除することはできない。こうした限界もエスノグラフィックな調査には付随していることを付記しておく。フィールドノーツの分析を通じて、焦点化された研究テーマに関してはインタビュー調査も実施した。フィールド調査を実施した「国フェス」は15種類、経年で行ったものを含めると延べ21回となった。

4. 研究成果

研究の成果は4件の国内学会と4件の国際学会で口頭発表を行い、5本の論文にまとめた。その中から主だったものについて、その学術的および社会的意義、今後の展望を含めて記す。

「日本のなかの外国フェスタ（「国フェス」）におけるディスコース実践の研究」（多文化関係学会第15回年次大会 2016年）では、「国フェス」の会場内で、掲げている国名がどのように使われているかを言語景観調査に基づいて分析した。その結果、名詞に先行して類型を形成（例：「韓国お粥」）、形容詞に続いて質感を表現（例：「おいしいペルー」）、擬人化（例：「こんにちはベトナム」）、省略、空間を埋める、などの機能が見られた。また、「国フェス」間に共通の特徴として、特別なものや、限定的なもの、寄せ集めたものを指し示して国家名が用いられたり、同じ国名を用いながら相反する価値や質感を表している事例（例：「遠い」と「近い」など）、複数の意味解釈が可能な事例が認められた。国名には様々な意味が込められるものの、総じて格上のもの、特別なもの、お得な組み合わせ、を意味するために用いられる傾向が確認された。こうしたディスコース実践の傾向が、「国フェス」参加者にとって、どのような国家イメージ形成につながるのか、移民のナショナルアイデンティティの称揚や維持・継承への関与、日本人参加者の国際理解、多文化共生、ステレオタイプに何らかの作用を及ぼしうるのか、については更に探求していく必要があることを指摘した。

“Discursive Geography: Connecting and Distancing Place Names in Nation-specific Festivals in Tokyo” (International Conference on Sociolinguistics (ICS), 2018) の研究発表では、ミャンマー祭りを事例として、国名の他に、州、都道府県、市町村名、観光地などの地名と、方角や経路、所要時間などがどのようにフェス会場で展開されているかの分析結果を示した。国名は日本よりミャンマーの方が圧倒的に多く使用されているが、市町村名や駅名など、より細かい地名になると日本の方が多用される傾向が確認された。これは、「国フェス」の対象であるミャンマーの地名については大まかに示されるのに対し、開催地である日本の地名の提示は、日本国内でミャンマー関連の事業やビジネスを展開している事業所を紹介するためである。そのため、ミャンマーの地名は東西南北といった世界地図上の方角で示される傾向があるのに対し、日本国内の場所については所要時間や経路など、アクセスに関連する語も共起する。両国以外の国名については、ミャンマーに隣接する周辺国の出現頻度が高まる。纏めるとミャンマーについては東南アジアの位置づけも含め、巨視的な地政学的なディスコースが、日本については祭りの開催地である東京やフェス会場を起点に微視的な生活圏のディスコースがフェス場で展開されていることが確認された。

「国フェスに見るディスコースの共有と転換 ミャンマー祭りを事例として」(『多文化関係学』14号:3-21, 2017年)では、ミャンマー祭り内で行われている写真展と日焼け止め「タナカ」のスキンケア体験を促す活動についてディスコース分析を行った。両者は、活動の場所や展開手順において別の活動である。しかし、ディスコース分析からは「自然」と「不変性」というミャンマー像のディスコースに重複が見られた。この重複は、ミャンマーに対して「いつも変わらず」「悠久の時を経て」「自然に恵まれている」といったイメージを定着させるはたらきが見出される。他方で、スキンケア体験には「不変性」とは反対の「変化」のディスコースが混在することも確認された。この一見、正反対の意味を備える語が現れるところには、「美容」のディスコースが展開されていた。すなわち「美容」への関連付けが、「不変性」から「変化」へと転換させる、動的なディスコース実践となっていることが見出された。ここから、「国フェス」の場合は、「今、ここ」にはないディスコース（静的なディスコース）の共有と、その場で流通しているディスコース（動的なディスコース）が接点を作り出すことで活気を生み出していることが示唆された。

“Bringing in a Nation: Multimodal discourse analysis of language use in nation-specific festivals in Tokyo” (Sociolinguistics Symposium 22, 2018)では、引き続きミャンマー祭りを事例として、日焼け止め「タナカ」の画像を含めたマルチモーダルなディスコース分析を行った。実際の会場だけではなく、公式HPなども分析の対象に加えた。その結果、ミャンマーでのタナカの提示については、貧困や教育機会の不足など、社会的な課題の側面が子どもの画像と共に提示される傾向があり、日本でのタナカの流通については、無添加や自然由来、美白など、健康と美容に関連付けられる傾向が認められた。このことから、ある特定のモノやコトについてのディスコースは、直線的に紹介されるのではなく、場所と連動して変化する様相が確認された。加えて、それはインターネット空間にも連動していることを確認した。こうしたディスコース実践が、当該国へのステレオタイプ化をはじめ国際理解にどう影響しているかなどは批判的観点も含めて見ていく必要がある。

「異国フェスの言語政策論的分析 台湾フェスタのステージトークを事例として」(『青山国際政経論集』98:53-77, 2017年)では、台湾の現住民族であるタイヤル族のルーツを持ち、台湾で生まれ、日本で学校教育を受け、日本とアメリカの両方で高等教育を受けてきた歌手が、多言語で歌うだけでなく、複数の言語を織り交ぜながら楽曲紹介を行うプロセスについて、言語

管理の観点から分析を行った。演者は客席の反応を見ながら、説明する言語と、どこまで説明するか、何を引き合いに出して説明するかなどを、その場で調整していく。部分的にはあるが、原住民語で聴衆と一緒に歌えるよう会場を誘導する。聴衆の反応を見ながら、大多数にとって未知であることを探知し、それについて情報量を調整していく。こうした言語管理は、演者自身が言語圏を越境した経験と、多言語環境での公演経験から生み出されていることが見出された。こうした巧みな言語管理事例について、その方略を抽出して書き出していくことが、多言語公共空間の言語政策を考える上で有効であると纏めた。

“Language use in foreign and immigrant festivals” (Multidisciplinary Approaches in Language Policy & Planning Conference (LPP), 2017)では、フィールド調査を実施した15の「国フェス」を概観し、そこに認められる言語政策の範疇に入る諸活動を抽出して整理した。整理のために、公式HPやSNSなどのデジタル領域、実際の「国フェス」会場について、ステージ、出店ブース、ワークショップなどの参加型活動の3領域、計4領域に分けた。さらに、多言語の併存を促す場面と、多言語使用に支障をきたす場面を整理し、事例として提示した。ステージ上では、複数話者による活発な相互作用が、通訳者の入る余地に制約を与える場面があった。また、「国フェス」の対象となる国家が多言語国家であったとしても、その国を代表する一言語が選択される傾向が認められた。これは公式HP上などの準備段階から収斂が進んでいく過程が確認された。ただし、会場を丁寧に見ていくと、数は少ないながら、少数派言語や原住民・先住民言語を言語資源・文化資源とした活動が見られる。台湾語を付記したラインスタンプの頒布や、アイルランド語がプリントされたTシャツの販売、手話の紹介などの例である。「国フェス」を、多文化共生や多様性の価値を確認する機会としていくためには、代表的なシンボルに収斂させる力動がどう展開されているかを明らかにしつつ、マイノリティによる特徴的な活動事例にも注目していくことが求められる。こうした事例蓄積が、多様性にかかれた公共場の形成はどのようであるべきか、どのような準備が必要かなどを検討するために役立つと期待される。

上記で得られた知見に、イベントのボランティア募集などの準備段階で展開される言語政策的な活動を含め、「東京周辺の国フェスにおける言語政策的営為 エスノグラフィックなフィールド調査から」(『青山国際政経論集』2020年)にまとめた。本研究の15事例には、明文化された言語政策を持っている「国フェス」はなかった。しかし、各々の「国フェス」は、回を重ねるごとに、運営者や実践者のなかで言語政策的なヒントやノウハウが経験的に蓄積されていく。加えて、参加者の新たな参入は、その場に合った自由な言語の選択や調整を可能にする面もある。一方で、当初描いていた言語管理、特に当該国の言語を活用する場がうまく展開させられなかったり、少数言語に関連する活動が制約を受けてしまっている場面も確認された。多言語化する公共空間で、どのような言語政策的な課題が内包されており、課題を乗り越えるきっかけがどこにあるかを見出す上でも、「国フェス」のような空間で、どのような言語政策的営為が展開されているかを見ていく意義があると言えよう。

「国フェス」はまだ蓄積も浅く、その存在基盤も必ずしも堅固とは言えないものもある。運営主体が入れ替わり、目的や手続きが大きく変更になったり、継続すら危ぶまれている「国フェス」もある。そのため、その場で得られた知見を一般化することは難しい。しかし、そのような環境下にあるがゆえに、その場で生み出される人々の相互協力や即興的な課題対処も確認される。そこから、グローバル公共空間の秩序形成について、示唆が得られることが予見される。方法論上の課題も残されているが、国内外で開催される「国フェス」実践場において参与観察者として関わり続けることで、ひとつひとつの課題に丁寧に向き合い、ひとつずつ乗り越えていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 猿橋順子	4. 巻 101
2. 論文標題 国フェスの今日の特徴 エスノグラフィックなフィールド調査からの分析	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 青山国際政経論集	6. 最初と最後の頁 89-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://www.agulin.aoyama.ac.jp/repo/repository/1000/20665/?lang=0&mode=0&opkey=R159192337561567&idx=6&codeno=&fc_val=	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 猿橋順子	4. 巻 98
2. 論文標題 異国フェスの言語政策論的分析 台湾フェスタのステージトークを事例として	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 青山国際政経論集	6. 最初と最後の頁 53-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://www.agulin.aoyama.ac.jp/repo/repository/1000/19894/?lang=0&mode=0&opkey=R159192344853284&idx=4&codeno=&fc_val=	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 猿橋順子 岡部大祐	4. 巻 14
2. 論文標題 国フェスに見るディスコースの共有と転換 ミャンマー祭りを事例として	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 多文化関係学	6. 最初と最後の頁 3-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 猿橋順子	4. 巻 97
2. 論文標題 移民コミュニティの祭りと「異国フェス」 聖なる対象としての民族・国家	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 青山国際政経論集	6. 最初と最後の頁 59-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://www.agulin.aoyama.ac.jp/repo/repository/1000/19563/?lang=0&mode=0&opkey=R159192348015678&idx=3&codeno=&fc_val=	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 猿橋順子	4. 巻 104
2. 論文標題 東京周辺の国フェスにおける言語政策的営為 エスノグラフィックなフィールド調査から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 青山国際政経論集	6. 最初と最後の頁 13-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計11件(うち招待講演 0件/うち国際学会 6件)

1. 発表者名 Junko Saruhashi
2. 発表標題 Bringing in a Nation: Multimodal discourse analysis of language use in nation-specific festivals in Tokyo
3. 学会等名 Sociolinguistics Symposium 22 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Junko Saruhashi
2. 発表標題 Discursive Geography: Connecting and Distancing Place Names in Nation-specific Festivals in Tokyo
3. 学会等名 Second International Conference on Sociolinguistics (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 猿橋順子
2. 発表標題 国フェスの言語使用 象徴・伝達・媒介機能の混淆
3. 学会等名 言語管理研究会「多言語社会と言語問題シンポジウム2018」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 猿橋順子
2. 発表標題 「国フェス」における言語の扱われ方 言語イメージへのインパクトの探究
3. 学会等名 日本言語政策学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Junko Saruhashi
2. 発表標題 Ideal participants in foreign and immigrant festivals: A case study of the Irish festival in Tokyo
3. 学会等名 15th conference of International Pragmatic Association (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Junko Saruhashi
2. 発表標題 Language use in foreign and immigrant festivals
3. 学会等名 Multidisciplinary Approaches in Language Policy & Planning Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Daisuke Okabe
2. 発表標題 Does cancer matter?: Discourses in participatory cancer charity events in public places
3. 学会等名 6th New Zealand Discourse Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 猿橋順子
2. 発表標題 異国フェスの意味 在日外国人へのインタビュー調査から
3. 学会等名 異文化コミュニケーション学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 猿橋順子 岡部大祐
2. 発表標題 日本のなかの外国フェスタにおけるディスコース実践の研究
3. 学会等名 多文化関係学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 猿橋順子
2. 発表標題 異国フェスの言語管理 SNSからフェス場まで
3. 学会等名 言語管理研究会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Daisuke Okabe
2. 発表標題 "Engawa" of cancer care
3. 学会等名 Pacific Asian Communication Association (PACA) (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	岡部 大祐 (Okabe Daisuke) (90828261)	順天堂大学・国際教養学部・講師 (32620)	